

## アメリカン・ボード宣教師文書

—同志社女学校女性宣教師を中心として—

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(10)

阪上敦子 監訳  
秋山恭子  
杉野マリ子  
小林弘美  
檜本尚美  
竹田清子  
吉岡弘子

### 書簡翻訳：前号からの続き

〈デントン書簡285〉【秋山恭子 訳】

日本 京都 同志社

1905年1月14日

拝啓 バートン博士

どうか正規のものでない便箋<sup>1</sup>でお手紙を書くことをお許しください。実は女学校で一年間すばらしいお仕事をされたのち、本国へ帰国されるレッグさん<sup>2</sup>と横浜まで船でご一緒しています。彼女の帰国は大変残念ですが、体が弱く神経質な方ですので、私としては彼女が肉体的、精神的にブレイク・ダウンせずに、とにかく無事に母国に着くことができるとても嬉しいです。ボストンに立ち寄られ、ハーバード大学で勉強中の甥御さんに会われる予定

です。レグさんに事務局を訪ねてくれるように頼みました（コリンハント ハーバード大学気付と書けば彼女と連絡が取れるでしょう）。誰がレグさんの後を引き継ぐのですかと真っ先にあなた様はきっとお尋ねになることでしょう。現在のところケリー夫人<sup>3</sup>とフェルプス氏<sup>4</sup>が働いてくれていますが、ラーネッド博士<sup>5</sup>のお嬢さんのグレース<sup>6</sup>が、常勤の宣教師に任命されて〔同志社〕女学校に割り当てられ、太平洋ウーマンズ・ボードの支援があれば非常に嬉しいのですが。ミス・ラーネッド〔グレース〕は体調が思わしくありませんが、現在は快方に向かっています。次第に元気になって仕事を常勤でこなせるようになればと思います。彼女はおとなしそうに見えますが、素晴らしい教師で日本人にはとても好かれています。言葉の面では日本語の素地がありますから、日本での生活や仕事についてはよく知っていますので、我々が期待できる若い女性の中で一番の候補でしょう。バートン博士、ぜひともこの願いを認めていただけないでしょうか。太平洋ウーマンズ・ボードはきっと同意してくれるでしょうし、私としましては、ぜひとも彼女を任命していただきたいです。

近いうちにもう一人女学校に女性を派遣していただきたいとも思っています。教養と経験を兼ね備えたレグさんのような女性を望みます。唱歌と楽器の両方を上手に教えることが出来る教師です。その上、できればドイツ語やフランス語の知識がある人です。この手紙は秘密ですので事務局に出入りする人たちには漏れないように願いますし、ゴードン夫人<sup>7</sup>やレグさん、またその他の誰にもこの件については話さないで下さい。ですが音楽を教えている日本人<sup>8</sup>が間もなく結婚して辞めますので、その時には、音楽の授業を全て外国人の手に渡したいと強く願っています。素晴らしい教師を受け入れることができるならばとてもありがたいです。バートン博士、私は女学校の水準を非常に高く設定しておきたいと切に願っております。ご存知のように私は大学出ではありませんので、私の弱点を埋め合わせてくれる女性が女学校に来ることは大変重要です。この学校には3人の女性が必要です。とい

うのは、私は歳をとっていきますし2年後には休暇を取るつもりですので、誰かすぐに仕事を引き継いでいってくれる人がいるべきです。レグさんには日本に帰ってきてほしいです。給料がなくても、あるいは専任の宣教師でなくてもいいのです。と言うのは、あの方には専任の仕事をするほどの十分な体力はありませんし、日本に帰って来るかどうかあまりにも不確かですから。そこでミス・ラーネッドともう一人優れた女性を確保するために、バートン博士、私たちにご尽力をお願いできないでしょうか。

私達は女学校できつとすばらしい業<sup>わざ</sup>をなしているに違いないと確信しておりますし、もっとすばらしいことが成し遂げられますように、あなた様の心からの信頼とお助けを期待しております。

私たちのために献身的に働いてくださっていることに心から感謝申し上げます。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. デントンは letterhead のある便箋を使用。船会社 Pacific Mail SS Co. のマークと船名 SS. Korea が記載されている。
2. Legge, Helen Edith (1860-1946) アメリカン・ボードの宣教師ではないが、1904年1月から1年間同志社女学校で英語、英文学を教える。更に教師、校友にも英語、独語、仏語を教えた。1905年1月帰国。帰国後、父で高名なオックスフォード大学初代中国文学教授 James Legge (1815-1897) の伝記、*James Legge: Missionary and Scholar* (1905) を出版する。父の Legge は宣教師としてマラッカ、香港などアジアで30年以上を過ごし、中国の経典を英訳した。
3. Cary, Ellen Maria (1856-1946) 1877年 Abbot Academy 卒業。同年結婚。夫は Otis Cary (1851-1932)。アメリカン・ボードの宣教師として1878年夫と共に日本着任。神戸、岡山、大阪、そして1892年から1918年は同志社で活動。夫人も同志社女学校で英文法などを教えていた。
4. フェルプス 詳細不明
5. Learned, Dwight Whitney (1848-1943) 1873年イェール大学大学院卒業。

1875年来日し京都ステーションに所属。52年余り、同志社の教育に尽力。同志社大学初代学長。

6. Learned, Grace Whitney (1876-1962) 註5のDwight W. Learnedの長女。京都生まれ。1899年Mt. Holyoke Seminary卒業、1900年から1916年まで日本ミッションの準宣教師として同志社女学校で教える。1916年、京都でDr. William L. Curtisと結婚。1929年、夫が亡くなり伝道活動から引退。
7. Gordon, Agnes Helen (1852-1940) 1872年7月Marquis Lafayette Gordon (1843-1900)と結婚。同年9月アメリカン・ボード宣教師となった夫と来日。後にアメリカン・ボードの援助により創設された京都市左京区新堺町仁王門の相愛幼稚園の初代園長になる。
8. 音楽教師の山口義のことか。「山口芳子〔義〕は昨年〔1906年〕8月3日デントン嬢の客室に於いて結婚せられ、井深夫人となられたり。御良人は井深梶之介氏の令弟なり」との記載がある。(『同志社女学校期報第24号』p.54参照)

〈バートン書簡B-16〉【杉野マリ子 訳】

1905年1月26日

メアリー F. デントン

日本 京都 同志社

拝啓 デントン様

シカゴ大学のフルバート教授<sup>1</sup>が、デントンさんご自身が大学で選択される通信教育の科目について、あなたとやり取りされた書簡を私どもにたった今転送してこられました。教授はデントンさんからの何通かの手紙と、それに教授が返信された写しを添えておられ、先ほど受け取った書簡では、こちらでデントンさんが受講される科目の選択にしっかりと責任を持ち、あなたが大学で関心を持っていることにも気を配ってくれるように依頼してこられました。往復の書簡とシカゴ大学の講義要綱に目を通して、何かお役に立つと思われることをして差し上げる前に、あなたからもっと詳しく教えていただく必要があると感じています。事実、お役に立てる資格が私にあるとは思えません。この時点で、実際こういうことで私にどのような援助ができる

お考えなのか、知らせて頂けませんでしょうか。出来る限りの事はさせて頂く決意です。

こちらでは旅順陥落<sup>2</sup>のニュースを知り大喜びしました。しかしロシアが置かれている苦境、本国での蜂起<sup>3</sup>や外国での戦争などにただただ同情しています。しかし、このような状況の中に神の裁きは見えないでしょうか。神の掟に逆らう国は、個人と同様に苦しまねばなりません。

敬具

ジェームズ L. パートン

1. Hulbert, Jr, Eri Baker (1841-1907) のことか。Union College 卒業後、Hamilton 神学校を1865年卒業、長らく牧師をしたのち1881年より Union 神学校の教授となる。シカゴ大学との合併により1905年当時はシカゴ大学神学校の初代校長だった。そして亡くなる1907年までその職にあった。
2. 日露戦争において旅順攻囲戦（1904年8月19日-1905年1月1日）により旅順要塞を日本軍が攻略し陥落させた。
3. 国民生活の困窮などで1905年1月22日には血の日曜日事件、さらに戦艦ポチョムキン<sup>4</sup>の反乱が起これロシア第一革命が発生することになる。

〈パートン書簡 B-17〉【小林弘美 訳】

1905年2月13日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

1月14日付けのお手紙<sup>1</sup>有難うございます。今週手元に届きました。教えてくださったレグさん<sup>2</sup>の住所へすぐに便りを出して、この近くに居られる間にお会いしたいと伝えました。

グレース・ラーネッドさん<sup>3</sup>を直ちに専任の宣教師に任命し、あなたと連携して同志社の女子部で働くという了解のもとで支援が受けられるように、

太平洋ウーマンズ・ボード<sup>4</sup>へ登録することがあなたのご依頼ですね。あれ以来、ラーネッド博士に、お嬢さん [グレース] の任命の時期が [父親の] 判断としては熟しているかどうかお尋ねする手紙を書きましたが、まだ博士からの返事はありません。ボードに任命の件を持ち出す前に、この問いへの博士の判断を知りたいです。あなたからラーネッド博士に話して、彼の判断をお知らせくださることはできないでしょうか。この件についてはラーネッド博士が私に手紙をくださるのがよいかもかもしれません。

太平洋ウーマンズ・ボードが収入を相当増やせないかぎり、ミス・ラーネッドの給料を引き受けるのをきっとためらうでしょう。ボードはそのため今年いくつかのことを断念しました。[日本] ミッションからの要請がなければ、彼女を同志社に任命できないこともご理解いただいていることでしょう。ですから臨時委員会<sup>5</sup>でその問題を先ず取り上げていただけませんかでしょうか。女学校を助けてくれる人の重要性については疑いの余地はありませんし、今、[同志社] 女学校はあらゆる部門で強化されるべきだというご意見には全く同感です。今日ほど日本におけるキリスト教の働きが重要であり、しかも見通しが明るいことはなかったと信じています。

言うまでもありませんが、私は [日本での] キリスト教の働きを心から信じておりますので、出来るだけのことはするつもりです。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. デントン書簡 [285] への返信
2. レッグ 前出 (285) 註2 参照
3. グレース・ラーネッド 前出 (285) 註6 参照
4. 原文では W.B.M.P. (Woman's Board of Missions of the Pacific)
5. 原文では the C.A.I. (Committee ad Interim)

〈バートン書簡 B-18〉【樫本尚美 訳】

1905年 3月13日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

先週末ボストンに到着したレグさん<sup>1</sup>が立ち寄ってくれて、とても楽しいひとときを過ごしました。これまでの楽しい旅について、特に大陸を横断してシカゴ、ナイアガラの滝、ニューオーリンズ、ワシントン、フィラデルフィア、そしてニューヨークを訪れたときの話をしてくれました。レグさんは京都の〔同志社〕女学校についても、そして宣教師でありキリスト教伝道者としてのデントンさんご自身についても、手放しで誉めちぎっています。あなたは伝道活動への刺激を確かに与えてレグさんを〔イングランドへ〕送り出されました。これからもイングランドにいるレグさんと密接に連絡を取り合われることを願っていますし、きっとそうされることでしょう。彼女は女学校のために他の支援者を集めてくれるかも知れません。レグさんにお会いできて本当にうれしかったです。彼女のケンブリッジでの住所を送ってくださって有難うございます。レグさんはウーマンズ・ボードのご婦人がたとも会われて、クック夫人<sup>2</sup>とウーマンズ・ボードの会合にも出席されました。

神戸女学院のために資金を獲得できたように、そちらの女学校のためにも確保できればと願います。あなたの女学校の番はいつかきつと来るでしょうから、勇気を持ち続けてください。そしてあなたにはそれがお出来になると信じております。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. レッグ 前出 (285) 註2 参照
2. Cook, Georgiana Hemingway (1842-1921) 世界的な伝道者 Joseph Cook (1838-1901) の夫人。東部ウーマンズ・ボードの機関誌 *Life and Light for Woman* (1905年 12月号) では役職は「幹事」(Secretary) とある。夫のクックは1880年から1883年にかけて世界各地を伝道して成功を収めたが、これにも夫人は同行して来日している。

〈デントン書簡286〉【阪上敦子 訳】

京都 同志社

[1905年] 3月16日

拝啓 バートン博士

2月13日付のお手紙<sup>1</sup>を有難うございました。ミス・ラーネッド<sup>2</sup>は現在のところ、ここ [同志社] で仕事は出来ないとお気持ちです。勿論、正しい手順を踏んだ後でのことですが、太平洋ウーマンズ・ボードは彼女の採用を前向きに検討しているのですが、今すぐには受諾できないとのことでも最終的には来てくれる可能性があるかと信じて諦めておりません。とは言っても、お父上のオフィスで手伝いをしたいでしょうし、彼女ならその仕事を素晴らしくやれるでしょう。それにラーネッド博士は働きすぎですから。いずれにせよ、彼女はお父上の仕事を大いに助けることは確かです。

同志社のこの部分 [女子部] ではもっと助けが必要だと大いに痛感しています。賢明だと思えるなら、この件はミッション・ミーティングで取り上げられるでしょう。私は特に優れていて、最高の学識や才能に長けた人にだけ来て欲しいので、誰にでも公募で呼びかけてほしくありません。プリンマー・カレッジ<sup>3</sup>におられるバートン博士のいとこの方<sup>4</sup>がどなたか適任者をご存知ではないかと思っています。教育経験があること、そして経験があっても「頭の固くない人」、教えるのに疲れていない元気に授業ができる人です!

新しい校舎もぜひとも欲しいですし、基金も欲しいです! デイヴィス博士<sup>5</sup>



がこちらの状態をとともよくご存知ですので、何が必要か博士とご相談いただければととも有難いです。博士が十分にお伝えできると思います。

ご親切なお手紙を有難うございました。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. パートン書簡 [B-17] のこと。
2. ミス・ラーネッド 前出 (285) 註6 参照
3. Bryn Mawr College 米国ペンシルベニア州にある私立の名門女子大学。  
1885年、熱心なクエーカー教徒により創立された。セブン・シスターズ（アメリカ東部の名門女子大学7校）の一つで津田梅子や同志社女学校校長になる松田道も卒業生である。
4. Barton, George Aaron (1859-1942) このあとのパートン書簡 [B-19] にこのいとこの名前が出ている。カナダ、ケベック州生まれ。作家、米国聖公会聖職者であり、セム語及び宗教史学者。プリンマー・カレッジでは1891年から1922年までセム語の教授をしていた。シュメール語・アッカド語の粘土板・印・円筒印章を翻訳し著書も多数。
5. Davis, Jerome Dean (1838-1910) ニューヨーク州 Groton 生まれ。ペロイト大学及びシカゴ神学校を卒業する。アメリカン・ボードの宣教師として1871年12月来日、神戸での伝道活動の後、京都に移り新島襄の同志社英学校設立に協力して、終生、神学教育と学校の維持発展に尽力した。この書簡の頃は、健康を害して賜暇で帰国中であった。(1904年5月20日-1905年12月16日)

〈デントン書簡287〉【竹田清子 訳】

この手紙は先ほどパートン博士に出した私の手紙から抜けていたものです。

J. D. デイヴィス

京都 同志社

[1905年] 4月7日

拝啓 パートン博士

卒業式はかってないほど素晴らしいものでした。そして日露戦争やそれに

起因する様々な問題にもかかわらず、今年度は恵みに溢れています。僅かのものでたくさんのごことを成し遂げることができるのは非常に喜ばしいことです。ですが、出来ることがもっともっとありますし、おっしゃって下さった、いつか来るであろう「我々〔同志社女学校〕の番」<sup>1</sup>がもし早まりさえすれば、現在の働きももっとよくやり遂げられることでしょう。

3月13日付け<sup>2</sup>のお手紙やレグさん<sup>3</sup>へのご親切すべてに感謝申し上げます。レグさんはもっと多くの人材が必要だとお話になったことでしょうし、あなた様が近いうちに私たちのために誰かを、しかも一人ではなく少なくとも二人は見つけてくださると確信しています。ボードと同志社との関係は厄介なこと<sup>4</sup>がないわけではありません。実質的な学校運営をボードがしている神戸女学院のように、同志社女学校にもっと援助をお願いするのはたやすいことではありません。しかしここ女学校での仕事には大変励まされますし、我々が必要なものをいくら強く主張してもしすぎることはありません。基金<sup>5</sup>に向けてハリス夫人<sup>6</sup>には直接何らかの援助をお願いするつもりです。私たちの「同窓会」—（卒業生と在校生の会）は基金を集めようとして大変な努力をしています。同窓会が500円集めたら、すぐにそれに相当する額の500円を同窓会に寄付すると約束して下さっているレンウィック夫人<sup>7</sup>にお礼の手紙を書いています。また同窓会が1万円を集めましたら、その同額を学校に寄付して下さらないかどうかハリス夫人にもお尋ねたく思っています。大変な骨折りでしょうが、ハリス夫人が同窓会にやらせてくださるなら、同窓会はきっと基金を集めることができますし、達成するだろうと信じています。ハリス夫人からのお金は他のどなたからのよりもはるかに影響力が大きいと思います。といいますのは、日本の支援者や女学校の卒業生の間では夫人とご主人への絶大なる尊敬と敬愛があるからです。あなた様にその必要性をいくら強く言っても言い過ぎではありませんが、きっと関心や共感をお持ちくださっていると確信しております。デイヴィス夫妻<sup>8</sup>に一言付け加えていただくために、この手紙を博士ご夫妻にお送りいたします。デイヴィス博

士ほどこの状況を理解して下さっている方はおられません。もし私の手紙ですべてを分かりやすくご説明できていなければデイヴィス博士にお聞きくださるか、お役に立つような情報が私で補足できるならば、どうぞご慮なくお尋ねください。勿論、ハリス夫人にはあなた様のお許しなくお手紙は差し上げません。

ミス・ラーネッド<sup>9</sup>はまだ女学校で働かれるお気持ちにはなっておられないようなことを手紙で書きましたが、ご本人やご両親は宣教師に任命されて〔日本ミッションの〕会計の助手や幼稚園での仕事、そこから派生する仕事に就けたら喜ばれるだろうと思います。この女学校に優秀な音楽の教師と素晴らしい語学の教師がぜひとも欲しいのです。普通の教育や教養以上のものを持つ女性を望んでいます。太平洋ウーマンズ・ボードは少なくとも一人はいつでも採用できます。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. 前出 [B-18] の終わりにある文言。
2. パートン書簡 [B-18] のこと
3. レッグ 前出 (285) 註2参照
4. 神戸女学院とアメリカン・ボードの関係が良好であることに対して、同志社とボードには長年考え方に違いがあり、1890年、ボードの準宣教師であった新島襄が亡くなると、学校の運営方針のちがいがから関係が険悪になった。1895年、パートンを含むボードの委員が来日して同志社側と直接交渉したが溝は埋まらず、1896年にはボード派遣の宣教師が同志社から辞任を決議。翌年からは寄付金も途絶えた。
5. 1903年9月、女学校が同窓会と共に「同志社女学校基本金募集」を計画する。目標は最高額を1万円程度におき、当面の目標額を3000円とした。この年初めてデントンの指導でバザーが開催された。卒業生以外にも海外の慈善家にも援助を頼み、1932年には栄光館の建設、1940年には同窓会館や幼稚舎の建設などを達成した。
6. Harris, Martha Ann (1831-1916) 1890年竣工のハリス理化学校の建設費用を寄付した Jonathan Newton Harris (1815-1896) の未亡人か。ハリスとは1869年結婚。

7. Renwick, Pamela Helen Goodwin (1845-1931) オハイオ州生まれ。1864年オバリン大学卒業、カリフォルニア州クレアモントの最初の慈善家で地元で多大な貢献をした。太平洋ウーマンズ・ボード南部支部の役員でもあり、太平洋ウーマンズ・ボードの代表として1910年の世界伝道者会議にも出席。夫は大実業家 William Renwick で1889年没。1903年9月、息子と来日して同志社女学校も訪問した。
8. デイヴィス夫妻 夫の Jerome Dean Davis については前出〈286〉註5を参照のこと。妻は Frances H. Davis (1854-1922)。アメリカン・ボード宣教師として1883年4月に着任。Frances Hooper として同志社女学校で教える。その後、J. D. Davis の後妻となる。
9. ミス・ラーネッド 前出〈285〉註6参照

〈バートン書簡 B-19〉【秋山恭子 訳】

1905年4月22日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

3月16日付のお手紙<sup>1</sup>が手元に届いています。同志社へ行って教員と繋がり、デントンさんご自身とも連携していけるような人をきっと見つけられると確信しております。但しその費用を支払うだけの資金が手元にあればですが。今ちょうど神戸女学院では一時雇用を希望する者がかなり多くいますが、これは3年から5年間の仕事で、このために往復の旅費を支払い、500ドルまたは600ドルの給料をその間支払わなければなりません。誰が来るにしろ、その仕事のためには入念に人選すべきだということには同感です。ですが資金が確保されるまではこのために動くことはできないのです。現在の状況では、太平洋ウーマンズ・ボードにこの財政負担の受け入れを追加で依頼することはできないでしょう。

私のいところで、プリンマー大学<sup>2</sup>教授ジョージ A. バートン<sup>3</sup>がきっとできる限りの援助をしてくれるでしょう。そのうちに同志社への基金を増やす

ことができ、校舎も増築することができるかと期待しています。

私がロックフェラー氏<sup>4</sup>から寄付を得たことで始まった騒動<sup>5</sup>については何かお耳に入っていることでしょう。これ以上の騒ぎがなければ、氏からもっと寄付がもらえるだろうと期待しています。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. デントン書簡 [286] のこと。
2. Bryn Mawr 前出 (286) 註3 参照
3. バートン教授 前出 (286) の註4 参照のこと。
4. Rockefeller, John Davison (1839-1937) 米国の実業家で慈善家。スタンダード・オイル社を創業して石油市場を独占、ピーク時にはアメリカの石油の90%をコントロールした。大富豪となり引退後の40年間は資産の大部分を慈善活動に使った。
5. この寄付に関しては、アメリカン・ボード運営の日本、インド、セイロン、トルコ、ブルガリアの教育施設に対して、ロックフェラーから莫大な金額、10万ドルの寄付の申し出があったとの記事がアメリカン・ボードの機関誌 *The Missionary Herald* (1905年4月号 p.155) に見られる。だが、実際、日本への寄付の額についてはよく分かっていない。

〈デントン書簡288〉【小林弘美 訳】

京都 同志社女学校

1907年6月15日

拝啓 ベル様<sup>1</sup>

役員会に友人がいてくださるのは我々にはなんてすばらしいことでしょう！このことに深く感謝し、あなたと奥様が私たちのところへ戻ってこられるまで [運営の] 中枢におられるのは嬉しいことですし、きっと今おられるところで立派な宣教の仕事がされることでしょう。ミッション・ミーティングの報告を受け取っておられるでしょうから、太平洋ウーマンズ・ボードに我々が送った重要なお願いのことはご存知でしょう。この要望への返答はポスト

ン〔本部〕での対応いかんで大きく変わるでしょう。〔日本ミッションの〕委員会から太平洋ウーマンズ・ボードへの手紙を同封いたします。もし形式的な手続きの順番に間違いがあれば、正しく処理して下さるようお願いいたします。この案件については、私たちからアメリカン・ボードに要請するのだと理解していますので。アメリカン・ボードは太平洋ウーマンズ・ボードに推薦という形で決定して下さるのですが（それとも、残念なことに推薦しないというようなことがひょっとしてあるかもしれませんが）。

さてベル様、この件がぜひとも近いうちに採択されるように願っております。パートン博士がここ〔京都〕に来られたとき<sup>2</sup>、その計画に賛成してくださいました。（もし前の執行部とのいきさつ<sup>3</sup>のような、そんな対立が起こらないような予防手段が取られるだろうと日本ミッションが納得したなら、とのことでしたが）パートン博士はきっと現在の計画を完全に承認してくださいと思います。私は今詳しく手紙に書いて、帰国途中の博士<sup>4</sup>に手紙を届けようと思っています。

もし太平洋ウーマンズ・ボードがそれほどの多額の寄付を直ぐに集められないなら、アメリカン・ボード<sup>5</sup>が太平洋ウーマンズ・ボードに前もって立て替え払いをして、寄付が年ごとに入ると返却してもらおうということはできないでしょうか。

どうぞベル様、この案が通るように私たちをお助け下さい。そして秋までに校舎建設を開始できるように、この資金が是非とも早めに届くようにしてください！ご存知のように冬の間は建築作業はできませんが、来年4月までにはこの校舎を使用できるようになればと願っております！どうかあなた様の持てるお力の全てを私たちのためにお貸してください。どなたかお一人で寄付を全額引き受けてくださるような方をご存知ありませんでしょうか？

ミス・ラーネット<sup>6</sup>を英語教師に、そしてミス・オルチン<sup>7</sup>を音楽教師に、という要望を私たちのために通して下さるようお願いいたします。我が校に誰か欲しいと思って下さるのはよく存じております。ベル夫人の姉

妹の方<sup>8</sup>を得られなかったのは今も残念に思っています。

ニューイングランド音楽院で一年間のコースを取るのに、フローレンス<sup>9</sup>には助け—経済的な援助—が必要だとオルチン夫人<sup>10</sup>が言っておられます。そんな援助を見つけれられるように何かしていただけませんか。

あなた方お二人がおられないのは寂しいです。ぜひまた戻っていただきたいです。

女学校の仕事には大いに将来性があると思います。牧野氏<sup>11</sup>は神戸の教会の一つで10日間の伝道をされたところですが、50名以上が受洗を希望しました。同志社は原田社長<sup>12</sup>のような人を得て幸せです。スタンフォードさんご夫妻<sup>13</sup>が戻ってきてくださるのを楽しみにしています。

これで [日本] ミッションからのお願いはすべてお知らせしましたし、委員会の手紙も同封いたしますので、どうぞこれらすべてをきちんとした形式で進めていただき、あなた様のお力で、私たちがこの重要なお願いを認められるようにしていただけませんか。

ベル夫人によるしく。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. Bell, Enoch Frye (1874-1945) マサチューセッツ州生まれ。アメリカン・ボード宣教師。1898年イエール大学、1902年オーバーン神学校を卒業後、妻の Anna Elizabeth Bowman Bell (1873-1955) と来日。札幌、神戸を経て1904年から1905年には京都に在籍。だが夫人の体調不良により1905年帰国。1906年、ボストン本部の海外部門、副幹事 (Assistant Secretary) に就任する。
2. バートンは中国への出張の途中、1907年1月初旬から18日間日本に滞在した。この間、東京、京都、大阪、岡山などを訪れて、アメリカン・ボードの機関誌に、日本のキリスト教の現状を記事、“A New Dawn in Japan” (1月28日付) で報告している。この中で同志社の現状についても言及した。(The Missionary Herald 1907年4月号 pp.190-194参照)
3. 同志社とアメリカン・ボードの対立については前出 [287] の註4を参照のこと。

- この1907年頃には騒動は終結していたが、まだ皆の記憶には残っていた。
4. バートンは中国に長期出張中でこの手紙の6月15日にはまだ中国にいた。デントンは帰国途中のバートンにどこかで手紙を届けるつもりであったようだ。
  5. 原文では A.B.C.F.M. アメリカン・ボード (アメリカ外国伝道協会) American Board of Commissioners for Foreign Missions の略。
  6. ミス・ラーネッド 前出〈285〉註6参照
  7. Allchin, Florence Stratton (1884-1958) 大阪生まれ。アメリカン・ボードの宣教師。ボストンのシモンズ・カレッジ卒業。1909年来日。京都ステーションには1910年から1911年にかけて1年間在籍。同年 Charles W. Iglehart 牧師と結婚。父は、同じくアメリカン・ボードの宣教師で大阪を中心に伝道した George Allchin (1852-1935)。日本の宗教音楽の発展に多大な貢献を果たし賛美歌の編集者としても名高い。
  8. ベル夫人の姉妹 詳細不明
  9. フローレンス 註7参照
  10. Allchin, Nellie Stratton (1860-1921) ボストン生まれ。Mt. Holyoke Seminary 卒業。1882年 George Allchin と結婚して来日。註7のフローレンスの母、
  11. 牧野虎次 (1871-1964) 1885年同志社英学校入学、92年普通部卒業後、同神学校入学。新島襄から直接の指導を受ける。卒業後、1895年まで北海道集治監教誨師となる。1899年からイエール大学で神学を学び、1902年帰国。1903年、京都四条教会牧師となり伝道活動をする。そのかたわら、『基督教世界』などの編集員となる。1938年から47年には同志社第11代総長になった。
  12. 原田助 (1863-1940) 同志社英学校入学、後に神学校に転じる。1884年卒業。1885年按手札を受けて神戸教会牧師に就任。1888年渡米、シカゴ神学校、イエール大学に留学。1896年帰国のち、番町、平安、神戸の各教会の牧師を歴任。1907年から19年まで同志社第7代社長 (1917年総長と改称) に就任。同志社の大学発展に寄与した。
  13. Stanford, Arthur Willis (1859-1921) マサチューセッツ州生まれ、1882年アーモスト大学、85年イエール大学院卒業後、1886年結婚、同年11月妻 Jennie Pearson Stanford (1856-1941) とともに来日、1895年まで同志社神学校でヘブル語、旧約聖書を教えた。その後、1898年から1903年まで松山や神戸で伝道の後、休暇で1903年帰国。1907年8月再来日した。神戸ではミッションの事務代表、雑誌『旭光』を発行する。1920年退職、帰国する。夫人は夫の没後、1922年神戸に再来日。神戸女子神学校で婦人伝道師の養成に尽力する。1925年引退。



〈ベル書簡 BE-1〉【吉岡弘子 訳】

1907年 7月15日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

同志社女学校のために、そして〔日本〕ミッション<sup>1</sup>からの要請への決議を推し進めるために、出来るだけのことをしてほしいとの6月15日付のあなたの手紙<sup>2</sup>がちょうど届きました。ラーネッド博士ご自身が書かれたことや、女学校が必要としているものについては、個人的な知識からも〔日本〕ミッションの要請が緊急であると痛感しております。こちらでは公式議事録を太平洋ウーマンズ・ボードのご婦人方に既に転送していますので、熱心に、そして真剣に祈りつつその要請を考えてくださるものと信じております。

ご存じのように、バートン博士は9月の初めごろにボストンに到着される予定です<sup>3</sup>。博士はデントンさんとはつい最近話をされたばかりですので<sup>4</sup>、もし太平洋ウーマンズ・ボードが〔アメリカン・ボードの〕本部に説明を求めるようなことがあれば、博士が〔同志社女学校の〕状況をご説明できるでしょう。貴校の発展の必要性を心から信じておりますので、とりあえずは私ができることは全てするつもりです。実際、今の日本で我々に開かれている最重要の分野は女子教育のように思います。今後長きに渡って、ボードが日本でクリスチャンの女性を適切に育成するには多額の資金と労力を必要とするでしょう。個人的には、あなたと同じく、望まれているような女学校拡大の緊急性はよく理解しております。しかし、現時点では太平洋沿岸の人たちに今以上にその必要を知って貰い、理解して貰うためには、どのようにしたら私がお役に立てるのかよく分かりません。そして、残念ながら現在の状況下では、アメリカン・ボードが資金を前払いすることはできないのではないかと心配しています。決議もあなたが望んでおられるほどすぐには取り上げ

て貰えないと思います。ですが、うまくいくことを皆願っておりますし、その間できることは全てするつもりです。

ご親切にも妻と私が日本へ戻ることを望んでくださって有難うございます。日本ミッションの「<sup>ファミリー</sup>家族のような<sup>スピリット</sup>雰囲気」については私たちはよく話しますし、「<sup>ファミリー</sup>その家族」に、ぜひともまた戻りたいとしばしば思っています。しかし妻の健康状態は医師の証明書が貰えるにはまだほど遠い状態ですし、医師の許可が出るまでは、アメリカン・ボードも私たちの出国を許可しないでしょう。

今日、スタンフォードご夫妻<sup>5</sup>とお会いしましたが、お身体の具合がとてもよく嬉しかったです。夫人の話ですと、前回日本に戻られた時よりもお二人とも良い健康状態で今回は帰れそうとのことでした<sup>6</sup>。夫人には以前の病気の再発はみられないようです。

土曜日にアリス・ケリーさん<sup>7</sup>が来られましたが私は不在でした。近いうちに京都のことを二人で楽しくゆっくりお話したいと思っています。おそらく同志社女学校についての計画など何かご存じでしょうし、一歩進んだ最新の情報を教えて下さることでしょう。

京都でご一緒した時の楽しい思い出に、心からの感謝を込めて。

敬具

イーノック F. ベル

1. 日本ミッション (Japan Mission) はアメリカン・ボードの日本での自主運営の現地組織で日本で働くアメリカン・ボードの宣教師は全員が所属した。日本ミッション開催の会合での決議が初めて日本ミッションの方針となったが、人事・財務・伝道方針などにはボードの承認が必要となったのでボードのボストン本部の幹事 (Secretary) に日本ミッションの総意を伝え、幹事はその案件を運営委員会 (Prudential Committee) に諮った。(吉田亮「総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」『アメリカン・ボード宣教師—神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890—』同志社大学人文科学研究所編、現代史料出版、1999、pp.10-11参照)
2. デントン書簡 [288] のこと。

3. パートンは1907年9月11日ニューヨークに帰着。( *The Missionary Herald* 1907年10月号、p.498)
4. 前のデントン書簡 [288] の註2参照。パートンは京都で同志社を訪れたときにデントンとも出会い、同志社女学校の現状を聴いていたのだろう。
5. Stanford, Arthur Willis 前出 (288) 註13参照
6. スタンフォード夫妻の再来日は1907年8月8日サンフランシスコ出航、8月25日横浜着。神戸には10月2日に戻った。
7. Cary, Alice Elizabeth (1890- ?) 宣教師 Otis Cary (1851-1932) の長女で大阪生まれ。父、Otis Cary は1892年から同志社神学校教授として、教会史・説教・社会学を担当、また神戸女学院初代理事長も務めた。